

後世への最大遺物

内村鑑三

青空文庫

はしがき

この小冊子は、明治二十七年七月相州箱根駅において開設せられしキリスト教徒第六夏期学校において述べし余の講話を、同校委員諸子の承諾を得てここに印刷に附せしものなり。

事、キリスト教と学生とにかんすること多し、しかれどもまた多少一般の人生問題を論究せざるにあらず、これけだし余の親友京都便利堂主人がしいてこれを発刊せしゆえなるべし、読者の寛容を待つ。

明治三十年六月二十日

山において

内村鑑三

東京青

再版に附する序言

一篇のキリスト教的演説、別にこれを一書となすの必要なしと思ひしも、前発行者の勸告により、印刷に附して世に公にせしに、すでに数千部を出すにいたり、ここにおいて余はその多少世道人心を裨益することもあるを信じ、今また多くの訂正を加えて、再版に附することとはなしぬ、もしこの小冊子にしてなお新福音を宣伝するの機械となるを得ば余の幸福何ぞこれに如かん。

明治三十二年十月三十日

村において

内
村
鑑
三

東京角筈

改版に附する序

この講演は明治二十七年、すなわち日清戦争のあつた年、すなわち今より三十一年前、私がまだ三十三歳の壮年であつたときに、海老名弾正君司会のもとに、箱根山上、蘆の湖の畔においてなしたものであります。その年に私の娘のルツ子が生まれ、私は彼女を彼女の母とともに京都の寓居に残して箱根へ来て講演したのであります。その娘はすでに世を去り、またこの講演を一書となして初めて世に出した私の親友京都便利堂主人中村弥左衛門君もツイこのごろ世を去りました。その他この書成つて以来の世の変化

は非常であります。多くの人がこの書を読んで志を立てて成功したと聞きます。その内に私と同じようにキリスト信者になった者もすくなくないのことであります。そして彼らの内にある者は早くすでに立派にキリスト教を「卒業」して今は背教者をもって自から任ずる者もあります。またはこの書によつて信者になりて、キリスト教的文士となりて、その攻撃の鋒を著者なる私に向ける人もあります。実に世はさまざまであります。そして私は幸いにして今日まで生存らえて、この書に書いてあることに多く違わずして私の生涯を送つてきたことを神に感謝します。この小著そのものが私の「後世への最大遺物」の一つとなつたことを感謝します。「天地無始終、人生有生死」であります。しかし生死ある人

生に無死の生命を得るの途が供えてあります。天地は失せても失せざるものがあります。そのものをいくぶんなりと握るを得て生涯は真の成功であり、また大なる満足であります。私は今よりさらに三十年生きようとは思いません。しかし過去三十年間生き残ったこの書は今よりなお三十年あるいはそれ以上に生き残るであろうとみてもよろしかろうと思います。終りに臨んで私はこの小著述をその最初の出版者たる故中村弥左衛門君に献じます。君の靈の天にありて安からんことを祈ります。

大正十四年（一九二五年）二月二十四日

東京市外柏

木
に
お
い
て

内
村
鑑
三

夏期演説 後世への最大遺物

第一回

時は夏でございますし、処は山の絶頂でございます。それでここで私が手を振り足を飛ばしまして私の血に熱度を加えて、諸君の熱血をここに注ぎ出すことはあるいは私にできないことではな

いかも知れませんが、しかしこれは私の好まぬところ、また諸君もあまり要求しないところだろうと私は考えます。それでキリスト教の演説会で演説者が腰を掛けて話をするのはたぶんこの講師が嚆矢であるかも知れない（満場大笑）、しかしながらもしこうすることが私の目的に適うことでございますれば、私は先例を破つてここであなたがたとゆつくり腰を掛けてお話をしてもかまわないと思います。これもまた破壊党の所業だと思し召されてもよろしゅうございます（拍手喝采）。

そこで私は「後世への最大遺物」という題を掲げておきました。もしこのことについて私の今まで考えましたことと今感じますることとをみな述べますならば、いつもの一時間より長くなるか

も知れませぬ。もし長くなつてつまらなくなつたなら勝手にお帰りなすつてください、私もまたくたびれましたならばあるいは途中で休みを願うかも知れませぬ。もしあまり長くなりましたならば、明朝の一時間も私の戴いた時間でございますからそのときに述べるかも知れませぬ。ドウゾこういう清い静かなところにありますときには、東京やまたはその他の騒がしいところでみな気の立っているところとするような騒がしい演説を私はしたくないです。私はここで諸君と膝を打ち合せて私の所感そのままを演説し、また諸君の質問にも応じたいと思ひます。

この夏期学校に来ますついでに私は東京に立ち寄り、そのとき私の親爺と詩の話を行いました。親爺が山陽の古い詩を出して

くれました。私が初めて山陽の詩を読みましたのは、親爺からもらったこの本でした（本を手に持って）。でこの夏期学校にくるついでに、その山陽の本を再び持つてきました。そのなかに私の幼さいときに私の心を励ました詩がございます。その詩は諸君もご承知のとおり山陽の詩の一番初めに載っている詩でございます、「十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生、死、安得類古人、千載列青史」。有名の詩でございます、山陽が十三のときに作った詩でございます。それで自分の生涯を顧みてみますれば、まだ外国語学校に通学しております時分にこの詩を読みまして、私も自から同感に堪えなかつた。私のようにこんなに弱いもので子供のときから身体が弱うございましたが、こういうような弱い

身体であつて別に社会に立つ位置もなし、また私を社会に引ツ張つてくれる電信線もございませぬけれども、ドウゾ私も一人の歴史的の人間になつて、そうして千載青史に列するを得るくらいの人間になりたいという心がやはり私にも起つたのでございます。その欲望はけつして悪い欲望とは思つていませぬ。私がそのことを父に話し友達に話したときに彼らはたいへん喜んだ。「汝にそれほど希望があつたならば汝の生涯はまことに頼もしい」といつて喜んでくれました。ところが不意にキリスト教に接し、通常この国において説かれましたキリスト教の教えを受けたときには、青年のときに持つたところの千載青史に列するを得んというこの欲望が大分なくなつてきました。それで何となく厭世的の考えが

起つてきた。すなわち人間が千載青史に列するを得んというのは、まことにこれは肉欲的、不信者的、heathen 的の考えである、クリスチャンなどは功名を欲することはなすべからざることである、われわれは後世に名を伝えるとかいうことは、根コソギ取つてしまわなければならぬ、というような考えが出てきました。それゆえに私の生涯は実に前の生涯より清い生涯になったかも知れませぬ。けれども前のよりはつまらない生涯になった。マードロかなるだけ罪を犯さないように、なるだけ神に逆らつて汚らわしいことをしないように、ただただ立派にこの生涯を終つてキリストによつて天国に救われて、未来永遠の喜びを得んと欲する考えが起つてきました。

そこでそのときの心持ちはなるほどそのなかに一種の喜びがなかったではございませぬけれども、以前の心持ちとは正反対の心持ちでありました。そうしてこの世の中に事業をしよう、この世の中に一つ旗を挙げよう、この世の中に立つて男らしい生涯を送ろう、という念がなくなってしまうました。ほとんどなくなってしまうましたから、私はいわゆる坊主臭い因循的の考えになつてきました。それでまた私ばかりでなく私を教えてくれる人がソウでありました。たびたび……ここには宣教師はおりませぬから少しは宣教師の悪口をいっても許してくださいるかと思ひますが……宣教師のところへ往つて私の希望を話しますと、「あなたはそんな希望を持つてはいけませぬ、そのようなことはそれは欲心

でございます、それはあなたのまだキリスト教に感化されないところの心から起つてくるのです」というようなことを聞かされな
いではなかった。私は諸君たちもソウいうような考えにどこかで
出会ったことはないことはないだろうと思います。なるほど千載
青史に列するを得んということは、考えのいたしようによつては
まことに下等なる考えであるかも知れませぬ。われわれが名をこ
の世の中に遺したいというのでございます。この一代のわずかの
生涯を終つてそのあとは後世の人にわれわれの名を褒め立つても
らいたいという考え、それはなるほどある意味からいいますと
私どもにとっては持つてはならない考えであると思ひます。ちよ
うどエジプトの昔の王様が己れの名が万世に伝わるようにと思ふ

てピラミッドを作った、すなわち世の中の人に彼は国の王であつたということを知らしむるために万民の労力を使役して大きなピラミッドを作ったというようなことは、実にキリスト信者としては持つべからざる考えだと思われます。有名な天下の糸平が死ぬときの遺言は「己れのために絶大の墓を立てろ」ということであつたそうだ。そうしてその墓には天下の糸平と誰か日本の有名な人に書いてもらえと遺言した。それで諸君が東京の牛の御前に往つてごらんなさると立派な花崗石で伊藤博文さんが書いた「天下の糸平」という碑が建っております。それは、その千載にまで天下の糸平をこの世の中に伝えよというた糸平の考えは、私はクリスチャン的の考えではなかりうと思ひます。またそういう例が

ほかにもたくさんある。このあいだアメリカのある新聞で見ましたに、ある貴婦人で大金持の寡婦が、「私はドウゾ死んだ後に私の名を国人に覚えてもらいたい、しかし自分の持っている金を学校に寄附するとかあるいは病院に寄附するとかいうことは普通の人のなすところなれば、私は世界中にないところの大なる墓を作ってみた、そうして千載に記憶されたい」という希望を起した。先日その墓が成ったそうでございます。ドンナに立派な墓であるかは知りませぬけれども、その計算に驚いた、二百万ドルかかったというのでございます。二百万ドルの金をかけて自分の墓を建つたのは確かにキリスト教的の考えではございません。

しかしながらある意味からいいますれば、千載青史に列するを

得んという考えは、私はそんなに悪い考えではない、ないばかりでなくそれは本当の意味にとつてみますならば、キリスト教信者が持つてもよい考えでございまして、それはキリスト信者が持つべき考えではないかと思えます、なお、われわれの生涯の解釈から申しますと、この生涯はわれわれが未来に往く階段である。ちようど大学校にはいる前の予備校である。もしわれわれの生涯がわずかこの五十年で消えてしまうものならば実につまらぬものである。私は未来永遠に私を準備するためにこの世の中に来て、私の流すところの涙も、私の心を喜ばしむるところの喜びも、喜怒哀楽のこの変化というものは、私の靈魂をだんだんと作り上げて、ついに私は死なない人間となってこの世を去つてから、もつ

と清い生涯をいつまでも送らんとするは、私の持っている確信でございませぬ。しかしながらそのことは純粹なる宗教問題でございまして、それは私の今晚あなたがたにお話をいたしたいことではございませぬ。

しかしながら私にここに一つの希望がある。この世の中をズツト通り過ぎて安らかに天国に往き、私の予備学校を卒業して天国なる大学校にはいつてしまったならば、それでたくさんかと己れの心に問うてみると、そのときに私の心に清い欲が一つ起つてくる。すなわち私に五十年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずには死んでしまいたくない、との希望が起

つてくる。ドウゾ私は死んでからただに天国に往くばかりでなく、私はここに一つの何かを遺して往きたい。それで何もかならずしも後世の人が私を褒めたってくれいというのではない、私の名誉を遺したいというのではない、ただ私がドレほどこの地球を愛し、ドレだけこの世界を愛し、ドレだけ私の同胞を思ったかという記念物をこの世に置いて往きたいのである、すなわち英語でいう *emento* を残したいのである。こういう考えは美しい考えであります。私がアメリカにおりましたときにも、その考えがたびたびに私の心に起りました。私は私の卒業した米国の大学を去るときに、同志とともに卒業式の当日に愛樹を一本校内に植えてきた。これは私が四年も育てられた私の学校に私の愛情を遺しておきた

いためであった。なかには私の同級生で、金のあつた人はそればかりでは満足しないで、あるいは学校に音楽堂を寄附するもあり、あるいは書籍館を寄附するもあり、あるいは運動場を寄附するものがありました。

しかるに今われわれは世界というこの学校を去りまするときに、われわれは何もここに遺さずに往くのでございますか。その点からいうとやはり私には千載青史に列するを得んという望みが残っている。私は何かこの地球に *Memento* を置いて逝きたい、私がこの地球を愛した証拠を置いて逝きたい、私が同胞を愛した記念碑を置いて逝きたい。それゆえにお互いにここに生まれてきた以上は、われわれが喜ばしい国に往くかも知れませぬけれども、し

かしわれわれがこの世の中にあるあいだは、少しなりともこの世の中を善くして往きたいです。この世の中にわれわれの *Memento* を遺して逝きたいです。有名なる天文学者のハーシエルが二十歳ばかりのときに彼の友人に語って「わが愛する友よ、われわれが死ぬときには、われわれが生まれたときより、世の中を少しなりともよくして往こうではないか」というた。実に美しい青年の希望ではありませんか。「この世の中を、私が死ぬときは、私の生まれたときよりは少しなりともよくして逝こうじゃないか」とハーシエルの伝記を読んでごらん下さい。彼はこの世の中を非常によくして逝った人でありませぬ。今まで知られない天体を全く描いて逝った人でありませぬ。南半球の星を、何年間かアフリカの希

望峰植民地に行きまして、スツカリ図に載せましたゆえに、今日の天文学者の知識はハーシエルによつてドレだけ利益を得たか知れない。それがために航海が開け、商業が開け、人類が進歩し、ついに宣教師を外国にやることが出き、キリスト教伝播の直接間接の助けにどれだけなつたか知れませぬ。われわれもハーシエルと同じに互いにみな希望 *Ambition* を遂げようは(う)まいませぬか。われわれが死ぬまでにはこの世の中を少しなりとも善くして死にたいではありませんか。何か一つ事業を成し遂げて、できるならばわれわれの生まれたときよりもこの日本を少しなりともよくして逝きたいではありませんか。この点についてはわれわれ皆々同意であろうと思います。

それでこの次は遺物のことです。何を置いて逝こう、という問題です。何を置いてわれわれがこの愛する地球を去ろうかということです。そのことについて私も考えた、考えたばかりでなくたびたびやってみました。何か遺りたい希望があつてこれを遺そうと思いましたが。それで後世への遺物もたくさんあるだろうと思います。それを一々お話しすることはできないこととございます。けれども、このなかに第一番にわれわれの思考に浮ぶものからお話しをいたしたいと思えます。

後世へわれわれの遺すものなかにまず第一番に大切なものがある。何であるかという金です。われわれが死ぬときに遺産金を社会に遺して逝く、己の子供に遺して逝くばかりでなく、社会

に遺して逝くということですが、それは多くの人の考えにあるところではないかと思えます。それでソウいうことをキリスト信者の前にいいますと、金を遺すなどということとは実につまらないことではないかという反対がジキに出るだろうと思えます。私は覚えております。明治十六年に初めて札幌から山男になって東京に出てきました。その時分に東京には奇体な現象があつて、それを名づけてリバイバルというたのです。その時分私は後世に何を遺さんかと思つておりしかというに、私は実業教育を受けたものであつたから、もちろん金を遺したかつた、億万の富を日本に遺して、日本を救つてやりたいという考えをもつておりました。自分には明治二十七年になつたら、夏期学校の講師に選ばれるという

考えは、その時分にはチツトもなかったのです（満場大笑）。金を遺したい、金満家になりたい、という希望を持つておったのです。ところがこのことをあるリバイバルに非常に熱心の牧師先生に話したところが、その牧師さんに私は非常に叱られました。

「金を遺したい、というイクジのない、そんなものはドウにもなるから、君は福音のために働きたまえ」というて戒められた。しかし私はその決心を変更しなかった。今でも変更しない。金を遺すものを賤しめるような人はやはり金のことに賤しい人でありませぬ、吝嗇な人であります。金というものは、ここで金の価値について長い講釈をするには及びませぬけれども、しかしながら金というものの必要は、あなたがた十分に認めておいでなさるだろう

と思います。金は宇宙のものであるから、金というものはいつでもできるものだという人に向つて、フランクリンは答えて「そんなら今一拵えてみたまえ」と申しました。それで私に金などは要らないというた牧師先生はドウいう人であつたかというに、後で聞いてみると、やはりずいぶん金を欲しがっている人だそうです。それで金というものは、いつでも得られるものであるということ、われわれが始終持つてゐる考えでございませうけれども、實際金の要るときになつてから金というものは得るに非常にむずかしいものです。そうしてあるときは富というものは、どこでも得られるように、空中にでも懸つてゐるもののように思いますけれども、その富を一つに集めることのできるものは、これは非常に神

の助けを受くる人でなければできないことでもあります。ちやうど秋になって雁は天を飛んでいる。それは誰が捕つてもよい。しかしその雁を捕ることはむずかしいことでもあります。人間の手に雁が十羽なり二十羽なり集まつてあるならば、それに価値がありません。すなわち、手の内の一羽の雀は木の上におるところの二羽の雀より貴い、というのはこのことでもあります。そこで金というのは宇宙に浮いているようなものでございますけれども、しかしながらそれを一つにまとめて、そうして後世の人がこれを用いることができるように溜めて往かんとする欲望が諸君のうちにあるならば、私は私の満腔の同情をもって、イエス・キリストの御名によって、父なる神の御名によって、聖霊の御名によって、教会

のために、国のために、世界のために、「君よ、金を溜めたまえ」というて、このことをその人に勧めるものです。富というものを一つにまとめるということは一大事業です。それでわれわれの今日の実際問題は社会問題であろうと、教会問題であろうと、青年問題であろうと、教育問題であろうとも、それを煎じつめてみれば、やはり金銭問題です。ここにいたって誰が金が不要だなどというものがありますか。ドウゾ、キリスト信者のなかに金持が起つてもらいたいです、実業家が起つてもらいたいです。われわれの働くときに、われわれの後楯になりました、われわれの心を十分にわかった人がわれわれを見継いでくれるということは、われわれの目下の必要でございませう。それで金を後世に遺そうとい

欲望を持っているところの青年諸君が、その方に向つて、神の与えたる方法によつて、われわれの子孫にたくさん金を遺して下さらんことを、私は実に祈ります。アメリカの有名なるフィラデルフィアのジラードというフランスの商人が、アメリカに移住しまして、建てた孤児院を、私は見ました。これは世界第一番の孤児院です。およそ小学生徒くらいのものが七百人ばかりおります。中学、大学くらいまでの孤児をズツとならべますならば、たぶん千人以上のように覚ええました。その孤児院の組織を見まするに、われわれの今日日本にあるところの孤児院のように、寄附金の足らないために事業がさしつかえるような孤児院ではなくして、ジラードが生涯かかって溜めた金をことごとく投じて建てたもので

す。ジラードの生涯を書いたものを読んでみますると、なんでもない、ただその一つの目的をもって金を溜めたのです。彼に子供はなかった、妻君も早く死んでしまった。「妻はなし、子供はなし、私には何にも目的はない。けれども、どうか世界第一の孤児院を建ててやりたい」というて、一生懸命に働いて拵えた金で建てた孤児院でございます。その時分はアメリカ開国の早いころでありましたから、金の溜め方が今のようによくゆかなかつた。しかし一生涯かかって溜めたところのものは、おおよそ二百万ドルばかりでありました。それをもってペンシルバニア州に人の気をつかぬ地面をたくさん買った。それで死ぬときに、「この金をもって二つの孤児院を建てろ、一つはおれを育ててくれたところの

ニューオルリーonzに建て、一つはおれの住んだところのフィラデルフィアに建てろ」と申しました。それで妙な癖があつた人とみえまして、教会というものをたいそう嫌つたのです。それで、「おれは別にこの金を使うことについて条件はつけないけれども、おれの建つたところの孤児院のなかに、デノミネーションすなわち宗派の教師は誰でも入れてはならぬ」という稀代な条件をつけて死んでしまった。それゆえに、今でもメソジストの教師でも、監督教会の教師でも、組合教会の教師でも、この孤児院にははい入ることはお気の毒でございますけれどもできません（大笑）。そのほかは誰でもそこにはいることができる。それでこの孤児院の組織のことは長いことでございますから、今ここにお話し申しま

せぬけれども、前に述べた二百万ドルをもつて買い集めましたところの山です。それが今日のペンシルバニア州における石炭と鉄とを出す山でございます。実に今日の富はほとんど何千万ドルであるかわからない。今はどれだけ事業を拡張してもよい、ただただ拡張する人がいないだけです。それでもし諸君のうち、フィラデルフィアに往く方があれば、一番にまずこの孤児院を往つて見ることをお勧め申します。

また有名なる慈善家ピーボディーはいかにして彼の大業を成したかと申しまするに、彼が初めてベルモントの山から出るときには、ボストンに出て大金持ちになろうという希望を持つておつたのでございます。彼は一文なしで故郷を出てきました。それでボ

ストーンまではその時分はもちろん汽車はありませんし、また馬車があつても無銭では乗れませぬから、ある旅籠屋の亭主に向い、

「私はボストーンまで往かなければならぬ、しかしながら日が暮れて困るから今夜泊めてくれぬか」というたら、旅籠屋の亭主が、可愛想だから泊めてやろう、というて喜んで引き受けた。けれどもそのときにピーボデーは旅籠屋の亭主に向つて「無銭で泊まることは嫌だ、何かさしてくれるならば泊まりたい」というた。ところが旅籠屋の亭主は「泊まるならば自由に泊まれ」というた。しかしピーボデーは、「それではすまぬ」というた。そうして家を見渡したところが、裏に薪がたくさん積んであつた。それから「御厄介になる代りに、裏の薪を割らしてください」というて

旅籠屋の亭主の承諾を得て、昼過ぎかかつて夜まで薪を挽き、これを割り、たいていこのくらいで旅籠賃に足ると思うくらいまで働きまして、そうして後に泊まったということでもあります。そのピーボデーは彼の一生涯を何に費したかというと、何百万ドルという高は知っておりませぬけれども、金を溜めて、ことに黒人の教育のために使った。今日アメリカにおります黒人がたぶん日本人と同じくらいの社交的程度に達しておりますのは何であるかというに、それはピーボデーのごとき慈善家の金の結果であるといわなければなりません。私は金のためにはアメリカ人はたいへん弱い、アメリカ人は金のためにはだいぶ侵害されたる民であるということも知っております、けれどもアメリカ人のなかに金

持ちがありました、彼らが清き目的をもって金を溜めそれを清きことのために用うるといふことは、アメリカの今日の盛大をいたした大原因であるといふことだけは私もわかつて帰つてきました。それでもしわれわれのなかにも、実業に従事するときこういう目的をもって金を溜める人が出てきませぬときには、本当の実業家はわれわれのなかに起りませぬ。そういう目的をもって実業家が起りませぬならば、彼らはいくら起つても国の益になりませぬ。ただただわずかに憲法発布式のとくに貧乏人に一万円……一人に五十銭か六十銭くらいの頭割をなしたというような、ソナ慈善はしない方がかえつてよいです。三菱のような何千万円というように金を溜めまして、今日まで……これから三菱は善い事業をす

るかと思はれておりますけれども……今日まで何をしましたか。彼自身が大いに勢力を得、立派な家を建て立派な別荘を建てましたけれども、日本の社会はそれによつて何を利益したかというのと、何一つとして見るべきものはないです。それでキリスト教信者が立ちまして、キリスト信徒の実業家が起りました、金を儲けることは己れのために儲けるのではない、神の正しい道によつて、天地宇宙の正当なる法則にしたがつて、富を国家のために使うのであるという実業の精神がわれわれのなかに起らんことを私は願う。そういう実業家が今日わが国に起らんことは、神学生徒の起らんことよりも私の望むところでございます。今日は神学生徒がキリスト信者のなかに十人あるかと思うと、実業家は一人もありません。

百人あるかと思うと実業家は一人もない。あるいは千人あるかと思うと、一人おるかおらぬかというくらいであります。金をもつて神と国とに事えようという清き考えを持つ青年がない。よく話に聴きまするかの紀ノ国屋文左衛門が百万両溜めて百万両使つてみょうなどという賤しい考えを持たないで、百万両溜めて百万両神のために使つて見ようというような実業家になりたい。そういう実業家が欲しい。その百万両を国のために、社会のために遣して逝こうという希望は実に清い希望だと思ひます。今日私が自身に持ちたい望みです。もし自身にできるならばしたいことですが、ふしあわせにその方の伎倆は私にはありませぬから、もし諸君のなかにその希望がありますならば、ドウゾ今の教育事業とかに従

事する人たちは、「汝の事業は下等の事業なり」などというて、その人を失望させぬように注意してもらいたい。またそういう希望を持った人は、神がその人に命じたところの考えであると思うて十分にそのことを自から奨励されんことを望む。あるアメリカの金持ちが「私は汝にこの金を譲り渡すが、このなかに穢ない銭は一文もない」というて子供に遺産を渡したそうですが、私どもはそういう金が欲しいのです。

それで後世への最大遺物のなかで、まず第一に大切のものは何であるかというに、私は金だというて、その金の必要を述べた。しかしながら何人も金を溜める力を持っておらない。私はこれはやはり一つの Genius (天才) ではないかと思いません。私は残念

ながらこの天才を持っておらぬ。ある人が申しまするに金を溜める天才を持っている人の耳はたいそう膨れて下の方に垂れているようですが、私は鏡に向って見ましたが、私の耳はたいそう縮んでおりますから、その天才は私にはないとみえます（大笑）。私の今まで教えました生徒のなかに、非常にこの天才を持っているものがある。ある奴は北海道に一文無しで追い払われたところが、今は私に十倍もする富を持っている。「今におれが貧乏になつたら、君はおれを助けろ」というておきました。実に金儲けは、やはりほかの職業と同じように、ある人たちの天職である。誰にも金を儲けることができるかということについては、私は疑います。それで金儲けのことについては少しも考えを与えてはならぬこ

ろの人が金を儲けようといたしますると、その人は非常に穢なく見えます。そればかりではない、金は後世への最大遺物の一つでございますけれども、遺しようが悪いとずいぶん害をなす。それゆえに金を溜める力を持った人ばかりでなく、金を使う力を持った人が出てこなければならぬ。かの有名なるグールドのように彼は生きているあいだに二千万ドル溜めた。そのために彼の親友四人までを自殺せしめ、アチラの会社を引き倒し、コチラの会社を引き倒して二千万ドル溜めた。ある人の言に「グールドが一千万ドルとまとまった金を慈善のために出したことはない」と申しました。彼は死ぬときにその金をどうしたかという、ただ自分の子供にそれを分け与えて死んだだけであります。すなわちグールド

ドは金を溜めることを知って、金を使うことを知らぬ人であつた。それゆえに金を遺物としようと思う人には、金を溜める力とまたその金を使う力とがなくてはならぬ。この二つの考えのない人、この二つの考えについて十分に決心しない人が、金を溜めるといふことは、はなはだ危険のことだと思ひます。

さて、私のように金を溜めることの下手なもの、あるいは溜めてもそれが使えない人は、後世の遺物に何を遺そうか。私はどうして金持ちになる望みはない、ゆえにほとんど十年前にその考えをば捨ててしまった。それでもし金を遺すことができせぬならば、何を遺そうかという實際問題が出てきます。それで私が金よりもよい遺物は何かと考へて見ますと、事業です。事業と

は、すなわち金を使うことです。金は労力を代表するものでありますから、労力を使ってこれを事業に変じ、事業を遺して逝くことができます。金を得る力のない人で事業家はたくさんあります。金持ちと事業家は二つ別物のように見える。商売する人と金を溜める人とは人物が違うように見えます。大阪にいる人はたいそう金を使うことが上手であるが、京都にいる人は金を溜めることが上手である。東京の商人に聞いてみると、金を持っている人には商売はできない、金のないものが人の金を使うて事業をするのであると申します。純粹の事業家の成功を考えてみますに、けっして金ではない。グールドはけっして事業家ではない。バンダービルトはけっして事業家ではない。バンダービルトは非常に金を

作ることが上手でございました。そして彼は他の人の事業を助けただけであります。有名のカルフオルニアのスタンフォードは、たいへん金を儲けることが上手であつた。しかしながらそのスタンフォードに三人の友人がありました。その友人のことは面白い話でございりますが、時がないからお話をしませぬけれども、金を儲けた人と、金を使う人と、数々あります。それですから金を溜めて金を遺すことができなならば、あるいは神が私に事業をなす天才を与えてくださつたかも知れませぬ。もしそうならば私は金を遺すことができませぬとも、事業を遺せば充分満足します。それで事業をなすということは、美しいことであるはもちろんです。ドウいう事業が一番誰にもわかるかという土木的の事業で

す。私は土木学者ではありませんせぬけれども、土木事業を見るものが非常に好きでございます。一つの土木事業を遺すことは、実にわれわれにとつても快樂であるし、また永遠の喜びと富とを後世に遺すことではないかと思ひます。今日も船に乗つて、湖水の向こうまで往きました。その南の方に當つて水門がある。その水門というのは、山の裾をくぐっている一つの隧道であります。その隧道を通つて、この湖水の水が沼津の方に落ちまして、二千石乃至三千石の田地を灌漑しているということを聞きました。昨日ある友人に会つて、あの穴を掘つた話を聞きました。その話を聞いたときに私は実に嬉しかった。あの穴を掘つた人は今からちようど六百年も前の人であつたらうということですが、誰が掘

つたかわからない。ただこれだけの伝説が遺っているのでございます。すなわち箱根のある近所に百姓の兄弟があつて、まことに沈着であつて、その兄弟が互いに相語つていうに、「われわれはこの有難き国に生まれてきて、何か後世に遺して逝かなければならぬ、それゆえに何かわれわれにできることをやろうではないか」と。しかし兄なる者はいうた。「われわれのような貧乏人で、貧乏人には何も大事業を遺して逝くことはできない」というと、弟が兄に向つていうには、「この山をくり抜いて湖水の水をとり、水田を興してやったならば、それが後世への大なる遺物ではないか」というた。兄は「それは非常に面白いことだ、それではお前は上の方から掘れ、おれは下の方から掘ろう。一生涯かかつても

この穴を掘ろうじゃないか」といつて掘り始めた。それでドウいうふうにしてやりましたかというのと、そのころは測量器械もないから、山の上に標を立て、両方から掘っていったとみえる。それから兄弟が生涯かかって何もせず……たぶん自分の職業になるだけの仕事はしたでございましょう……兄弟して両方からして、毎年毎年掘っていった。何十年でございますか、その年は忘れましたけれども、下の方から掘ってきたものは、湖水の方から掘っていった者の四尺上に往ったそうでございます。四尺上に往きましたけれども御承知の通り、水は高うございますから、やはり竜吐水のように向こうの方によく落ちるのです。生涯かかって人が見ておらないときに、後世に事業を遺そうというところの奇特の

心より、二人の兄弟はこの大事業をなしました。人が見てもくれない、褒めてもくれないのに、生涯を費してこの穴を掘ったのは、それは今日にいたつてもわれわれを励ます所業ではありませぬか。それから今の五カ村が何千石だかどれだけ人口があるか忘れましたが、五カ村が頼朝時代から今日にいたるまで年々米を取つてきました。ことに湖水の流れるところでありますから、早魃ということを感じたことはございません。実にその兄弟はしあわせの間であつたと思います。もし私が何にもできないならば、私はその兄弟に真似たいと思います。これは非常な遺物です。たぶん今往つてみましたならば、その穴は長きたぶん十町かそこの穴であります。ところが、そのころは煙硝もない、ダイナマイトもないと

きでございましたから、アノ穴を掘ることは実に非常なことでございましてらう。

大阪の天保山を切ったのも近ごろのことでございます。かの安治川を切った人は実に日本にとって非常な功績をなした人であると思ひます。安治川があるために大阪の木津川の流れを北の方に取りまして、水を速くして、それがために水害の患を取り除いてしまつたばかりでなく、深い港を拵えて九州、四国から来る船をことごとくアソコに繋ぐようになったのでございます。また秀吉の時代に切つた吉野川は昔は大阪の裏を流れておつて人民を艱ましたのを、堺と住吉の間に開鑿しまして、それがために大和川の水害というものがなくなつて、何十カ村という村が大阪の城の後

ろにできました。これまた非常な事業です。それから有名の越後の阿賀川を切ったことでございます。実にエライ事業でございませう。有名の新発田の十萬石、今は日本においてたぶん富の中心点であるだろうという所でございます。これらの大事業を考えてみるときに私の心のなかに起るところの考えは、もし金を後世に遺すことができぬならば、私は事業を遺したいとの考えです。また土木事業ばかりでなく、その他の事業でももしわれわれが精神を籠めてするときは、われわれの事業は、ちようど金に利息がつき、利息に利息が加わってきて、だんだん多くなってくるように、一つの事業がだんだん大きくなって、終りには非常なる事業となります。

事業のことを考えますときに、私はいつでも有名なデビッド・リビングストンのことを思い出さないことはない。それで諸君のうち英語のできるお方に私はスコットランドの教授ブレイキの書いた“Life and Letters of David Livingstone”という本を読んで貰うんなさることを勧めます。私一個人にとっては聖書のほかに、私の生涯に大刺激を与えた本は二つあります。一つはカーライルの『クロムウェル伝』であります。そのことについては私は後にお話をいたします。それからその次にこのブレイキ氏の書いた『デビッド・リビングストン』という本です。それでデビッド・リビングストンの一生涯はどういうものであったかという点、私は彼を宗教家あるいは宣教師と見るよりは、むしろ大事業家として尊

敬せざるをえません。もし私は金を溜めることができなかつたらば、あるいはまた土木事業を起すことができぬならば、私はデビッド・リビングストンのような事業をしたいと思いません。この人はスコットランドのグラスゴウの機屋の子でありまして、若いときからして公共事業に非常に注意しました。「どこかに私は」……デビッド・リビングストンの考えまするに……「どこかに私は一事業を起してみたい」という考えで、始めは支那に往きたいという考えでありまして、その望みをもって英国の伝道会社に訴えてみたところが、支那に遣る必要がないといって許されなかつた。ついにアフリカにはいつて、三十七年間己れの生命をアフリカのために差し出し、始めのうちはおもに伝道をしておりました。

けれども彼は考えました、アフリカを永遠に救うには今日は伝道ではいけない。すなわちアフリカの内地を探検して、その地理を明かにしこれに貿易を開いて勢力を与えねばいけぬ、ソウすれば伝道は商売の結果としてかならず来るに相違ない。そこで彼は伝道を止めまして探検家になったのでございます。彼はアフリカを三度縦横に横ぎり、わからなかつた湖水もわかり、今までわからなかつた河の方向も定められ、それがために種々の大事業も起つてきた。しかしながらリビングストンの事業はそれで終らない、スタンレーの探検となり、ペーテルスの探検となり、チャンバーレンの探検となり、今日のいわゆるアフリカ問題にして一つとしてリビングストンの事業に原因せぬものはないのでございます。

コンゴ自由国、すなわち欧米九カ国が同盟しまして、プロテスタント主義の自由国をアフリカの中心に立つるにいたったのも、やはりリビングストンの手によったものといわなければなりません。

今日の英国はエライ国である、今日のアメリカの共和国はエライ国であると申しますが、それは何から始まったかとたびたび考えてみる。それで私は尊敬する人について少しく偏するかも知れませぬが、もし偏しておったならばそのようにご裁判を願います、けれども私の考えますには、今日のイギリスの大なるわけは、イギリスにピューリタンという党派が起ったからであると思いません。アメリカに今日のような共和国の起ったわけは何であるか、イギリスにピューリタンという党派が起ったゆえである。しかし

ながらこの世にピューリタンが大事業を遺したといい、遺しつつあるというは何のわけであるかという、何でも無い、このなかにピューリタンの大将がいたからである。そのオリバー・クロムウエルという人の事業は、彼が政権を握ったのはわずか五年でありましたけれども、彼の事業は彼の死とともにまったく終つてしまつたように見えますけれども、ソウではない。クロムウエルの事業は今日のイギリスを作りつつあるのです。しかのみならず英国がクロムウエルの理想に達するにはまだズツと未来にあることだろうと思います。彼は後世に英国というものを遺した。合衆国というものを遺した。アングロサクソン民族がオーストラリアを従え、南アメリカに権力を得て、南北アメリカを支配するように

なつたのも彼の遺蹟といわなければなりません。

第二回

昨晩は後世へわれわれが遺して逝くべきものについて、まず第一に金のことの話をしたし、その次に事業のお話をいたしました。ところで金を溜める天才もなし、またそれを使う天才もなし、かつまた事業の天才もなし、また事業をなすための社会の位地もないときには、われわれがこの世において何をいたしたらよろしかろうか。事業をなすにはわれわれに神から受けた特別の天才が要るばかりでなく、また社会上の位地が要る。われわれはあるとき

はかの人は天才があるのに何故なんにもしないでいるかといつて人を責めますけれども、それはたびたび起る酷な責め方だと思いません。人は位地を得ますとずいぶんつまらない者でも大事業をいたすものであります。位地がありませんとエライ人でも志を抱いて空しく山間に終つてしまつた者もたくさんあります。それゆえに事業をもつて人を評することはできないことは明かなることだろうと思います。それゆえに私に事業の天才もなし、またこれになすの位地もなし、友達もなし、社会の賛成もなかつたならば、私は身を滅ぼして死んでしまい、世の中に何も遺すことはできないかという問題が起つてくる。それでもし私に金を溜めることができず、また社会は私の事業をすることを許さなければ、私はま

だ一つ遺すものを持っています。何であるかということ、私の思想です。もしこの世の中において私が私の考えを實行することができなければ、私はこれを実行する精神を筆と墨とをもって紙の上に遺すことができる。あるいはそうでなくとも、それに似たような事業がございます。すなわち私がこの世の中に生きているあいだに、事業をなすことができなければ、私は青年を薰陶して私の思想を若い人に注いで、そうしてその人をして私の事業をなさしめることができる。すなわちこれを短くいいますれば、著述をするということと学生を教えるということとであります。著述をすることと教育のことと二つをここで論じたい。しかしだいつ時がかかりますからただその第一すなわち思想を遺すということについて

て私の文学的觀察をお話ししたいと思います。すなわちわれわれの思想を遺すには今の青年にわれわれの志を注いでゆくも一つの方法でございますけれども、しかしながら思想そのものだけを遺してゆくには文学によるほかない。それで文学というものの要はまったくそこにあると思います。文学というものはわれわれの心に常に抱いているところの思想を後世に伝える道具に相違ない。それが文学の実用だと思えます。それで思想の遺物というものの大なることはわれわれは誰もよく知っていることであります。思想のこの世の中に実行されたものが事業です。われわれがこの世の中で実行することができないからして、種子だけを播いて逝こう、「われは恨みを抱いて、慷慨を抱いて地下に下らんとすれど

も、汝らわれの後に来る人々よ、折あらばわが思想を実行せよ」と後世へ言い遺すのである。それでその遺物の大いなることは実に著しいものであります。

われわれのよく知っているとおりに、二千年ほど前にユダヤのごくつまらない漁夫や、あるいはまことに世の中に知られない人々が、『新約聖書』という僅かな書物を書いた。そうしてその小さい本がついに全世界を改めたということは、ここにいる人にはお話しするほどのことはない、みなご存じであります。また山陽という人は勤王論を作った人であります。先生はドウしても日本を復活するには日本をして一団体にしなければならぬ。一団体にするには日本の皇室を尊んでそれで徳川の封建政治をやめてしまっ

て、それで今日いうところの王朝の時代にしなければならぬという大思想を持つておつた。しかしながら山陽はそれを実行しようかと思つたけれども、実行することができなかった。山陽ほどの先見のない人はそれを実行しようとして戦場の露と消えてしまつたに相違ない。しかし山陽はソナ馬鹿ではなかつた。彼は彼の在世中とてもこのことのできないことを知つていたから、自身の志を『日本外史』に述べた。そこで日本の歴史を述ぶるに當つても特別に王室を保護するようには書かなかつた。外家の歴史を書いてその中にはつきりといわずとも、ただ勤王家の精神をもつて源平以来の外家の歴史を書いてわれわれに遺してくれた。今日の王政復古を持ち來した原動力は何であつたかといえ、多くの歴

史家がいうとおり山陽の『日本外史』がその一つでありしことはよくわかつている。山陽はその思想を遺して日本を復活させた。今日の王政復古前後の歴史をことごとく調べてみると山陽の功の非常に多いことがわかる。私は山陽のほかのことは知りませぬ。かの人の私行については二つ三つ不同意なところがあります。彼の国体論や兵制論については不同意であります。しかしながら彼山陽の一つの Ambition すなわち「われは今世に望むところはな

いけれども来世の人に大いに望むところがある」といった彼の欲望は私が実に彼を尊敬してやまざるところであります。すなわち山陽は『日本外史』を遺物として死んでしまつて、骨は洛陽東山に葬つてありますけれども、『日本外史』から新日本国は生まれ

てきました。

イギリスに今からして二百年前に瘦ッこけて丈の低いしじゅう病身な一人の学者がおった。それでこの人は世の中の人に知られないで、何も用のない者と思われて、しじゅう貧乏して裏店のようなところに住まって、かの人は何をするかと人にいわれるくらい世の中に知れない人で、何もできないような人であつたが、しかし彼は一つの大思想を持つていた人でありました。その思想というは人間というものは非常な価値のあるものである、また一個人というものは国家よりも大切なものである、という大思想を持つていた人であります。それで十七世紀の中ごろにおいてはその説は社会にまったく容れられなかつた。その時分にはヨーロッパ

では主義は国家主義と定まっておった。イタリアなり、イギリスなり、フランスなり、ドイツなり、みな国家的精神を養わなければならぬとて、社会はあげて国家という団体に思想を傾けておった時でございました。その時に当ってどのような権力のある人であろうとも、彼の信ずるところの、個人は国家より大切であるという考えを世の中にくら発表しても、実行のできないことはわかりきっておった。そこでこの学者は私かに裏店に引っ込んで本を書いた。この人は、ご存じでありましょう、ジョン・ロツクであります。その本は、“Human Understanding”であります。しかるにこの本がフランスに往きまして、ルソーが読んだ、モンテスキューが読んだ、ミラボーが読んだ、そうしてその思想がフラン

ス全国に行きわたって、ついに一七九〇年フランスの大革命が起つてきまして、フランスの二千八百万の国民を動かした。それがためにヨーロッパ中が動きだして、この十九世紀の始めにおいてもジョン・ロックの著書でヨーロッパが動いた。それから合衆国が生まれた。それからフランスの共和国が生まれてきた。それからハンガリアの改革があつた。それからイタリアの独立があつた。実にジョン・ロックがヨーロッパの改革に及ぼした影響は非常にあります。その結果を日本でお互いを感じている。われわれの願いは何であるか、個人の権力を増そうというのではないか。われわれはこのことをどこまで実行することができるか、それはまだ問題でございませうけれども、何しろこれがわれわれの願いであり

ます。もちろんジョン・ロック以前にもそういう思想を持った人はあつた。しかしながらジョン・ロックはその思想を形に顕わして“Human Understanding”という本を書いて死んでしまった。しかし彼の思想は今日われわれのなかに働いている。ジョン・ロックは身体も弱いし、社会の位地もごく低くあつたけれども、彼は実に今日のヨーロッパを支配する人となつたと思います。

それゆえに思想を遺すということは大事業であります。もしわれわれが事業を遺すことができぬならば、思想を遺してそうして将来にいたつてわれわれの事業をなすことができると思う。そこで私はここでご注意を申しておかねばならぬことがある。われわれのなかに文学者という奴がある。誰でも筆を把つてそうして雑

誌か何かに批評でも載すれば、それが文学者だと思ふ人がある。それで文学というものは情け書生の一つの玩具になっている。誰でも文学はできる。それで日本人の考えに文学というものはまことに気楽なもののように思われている。山に引っ込んで文筆に従事するなどは実に羨しいことのように考えられている。福地源一郎君が不忍の池のほとりに別荘を建てて日蓮上人の脚本を書いている。それを他から見るとたいそう風流に見える。また日本人が文学者という者の生涯はどういう生涯であるだろうと思つているかというに、それは絵艸紙屋へ行つてみるとわかる。どういふ絵があるかというに、赤く塗つてある御堂のなかに美しい女が机の前に坐つておつて、向こうから月の上つてくるのを筆を翳して眺

めている。これは何であるかというところ紫式部の源氏の間である。これが日本流の文学者である。しかし文学というものはコンナものであるならば、文学は後世への遺物でなくしてかえって後世への害物である。なるほど『源氏物語』という本は美しい言葉を日本に伝えたものであるかも知れませぬ。しかし『源氏物語』が日本の士気を鼓舞することのために何をしたか。何もしいばかりでなくわれわれを女らしき意気地なしにした。あのような文学はわれわれのなかから根コソギに絶やしたい（拍手）。あのようなものが文学ならば、実にわれわれはカーライルとともに、文学というものには一度も手をつけたことがないということの世界に向って誇りたい。文学はソナなものではない。文学はわれわれが

この世界に戦争するときの道具である。今日戦争することはできないから未来において戦争しようというのが文学であります。それゆえに文学者が机の前に立ちますときにはすなわちルーテルがウォルムスの会議に立ったとき、パウロがアグリツパ王の前に立ったとき、クロムウエルが剣を抜いてダンバーの戦場に臨んだときと同じことでもあります。この社会、この国を改良しよう、この世界の敵なる悪魔を平らげようとの目的をもって戦争をするのであります。ルーテルが室のなかに入って何か書いておったときに、悪魔が出てきたゆえに、ルーテルはインクスタンドを取ってそれにぶつつけたという話がある。歴史家に聞くとこれは本当の話ではないといえます。しかしながらこれが文学です。われわれはほ

かのことで事業をすることができないから、インクスタンドを取って悪魔にぶツつけてやるのである。事業を今日なさんとするのではない。将来未来までにわれわれの戦争を続ける考えから事業を筆と紙とにのこして、そうしてこの世を終ろうというのが文学者の持っている Ambition であります。それでその贈物、われわれがわれわれの思想を筆と紙とに遺してこれを将来に贈ることが実に文学者の事業でありまして、もし神がわれわれにこのことを許しますならば、われわれは感謝してその贈物を遺したいと思う。有名なるウォルフ将軍がケベツクの市を取るときにグレイの Elegy を歌いながらいった言葉があります、すなわち「このケベツクを取るよりもわれはむしろこの Elegy を書かん」と。もちろん

Elegy は過激なるいわゆるルーテル的文章ではない。しかしながらこれがイギリス人の心、ウォルフ將軍のような心をどれだけ慰めたか、実に今日までのイギリス人の勇気をどれだけ励ましたか知れない。

トーマス・グレイという人は有名な学者で、彼の時代の人で彼くらいすべての学問に達していた人はほとんどなかったそうであります。イギリスの文学者中で博学、多才といったならばたぶんトーマス・グレイであつたらうという批評であります。しかしながらトーマス・グレイは何を遺したか。彼の書いた本は一つに集めたらば、たぶんこんなくらい（手真似にて）の本でほとんど二百ページか、三百ページもありましょう。しかしそのうちこれぞ

というて大作はありませぬ。トーマス・グレイの後世への遺物は
何にもない、ただElegyという三百行ばかりの詩でありました。

グレイの四十八年の生涯というものはElegyを書いて終つてしま
つたのです。しかしながらたぶんイギリスの国民の続くあいだは、
イギリスの国語が話されているあいだはElegyは消えないでしよ
う。この詩ほど多くの人を慰め、ことに多くの貧乏人を慰め、世
の中にまったく容れられない人を慰め、多くの志を抱いてそれを
世の中に発表することのできない者を慰めたものはない。この詩
によってグレイは万世を慰めつつある。われわれは実にグレイの
運命を羨むのであります。すべての学問を四十八年間も積んだ人
がただ三百行くらいの詩を遺して死んだというては小さいようで

ございますが、実にグレイは大事業をなした人であると思います。有名なるヘンリー・ビーチャーがいつた言葉に……私はこれだけつしてビーチャーが小さいことを針小棒大にしているた言葉ではないと思います……「私は六十年か七十年の生涯を私のように送りしよりも、むしろチャールス・ウエスレーの書いた“Jesus, Lover of my soul”の讚美歌一篇を作った方がよい」と申しました。チヨット考えてみるとこれはただチャールス・ウエスレーを尊敬するあまりに発した言葉であつて、けつしてビーチャーの心のなかから出た言葉ではないように思われますけれども、しかしながらウエスレーのこの歌をいく度か繰り返し返して歌ってみまして、どれだけの心情、どれだけの趣味、どれだけの希望がそのうちにある

かを見るとときには、あるいはビーチャーのいったことが本当であるかも知れないと思います。ビーチャーの大事業もけつしてこの一つの讚美歌ほどの事業をなしていないかも知れませぬ。それゆえにもしわれわれに思想がありますならば、もしわれわれがそれを直接に実行することができないならば、それを紙に写しましてこれを後世に遺しますことは大事業ではないかと思えます。文学者の事業というものはそれゆえに羨むべき事業である。

こういう事業ならばあるいはわれわれも行つてみたいと思う。こう申しますと、諸君のなかにまたこういう人があります。

「ドウモしかながら文学などは私らにはとてもできない、ドウモ私は今まで筆を執つたことがない。また私は学問が少い、とて

も私は文学者になることはできない」。それで『源氏物語』を見てとてもこういう流暢なる文は書けないと思い、マコーレーの文を見てとてもこれを学ぶことはできぬと考え、山陽の文を見てとてもこういうものは書けないと思い、ドウしても私は文学者になることはできないといって失望する人がある。文学者は特別の天職を持った人であつて文学はとてもわれわれ平凡の人間にできることではないと思う人があります。その失望はどこから起つたかという、前にお話しした柔弱なる考えから起つたのでございませぬ。すなわち『源氏物語』的の文学思想から起つた考えであります。文学というものはソナなものではない。文学というものはわれわれの心のありのままをいうものです。ジョン・バンヤンとい

う人はチットモ学問のない人でありました。もしあの人を読んだ本があるならば、タツタ二つでありました、すなわち『バイブル』とフォックスの書いた『ブック・オブ・マターズ』（"Book of Martyrs"）というこの二つでした。今ならばこのような本を読む。む耐力のある人はない。私は札幌にてそれを読んだことがある。十ページくらい読むと後は読む勇気がなくなる本である。ことにクエーカーの書いた本でありますから文法上の誤謬がたくさんある。しかるにバンヤンは始めから終りまでこの本を読んだ。彼は申しました。「私はプラトンの本もまたアリストテレスの本も読んだことはない、ただイエス・キリストの恩恵にあずかった憐れなる罪人であるから、ただわが思うそのままを書くのである」と

いって、"Pilgrim's Progress"（『天路歷程』）という有名なる本を書いた。それでたぶんイギリス文学の批評家中で第一番という人……このあいだ死んだフランス人、テーヌという人であり……その人がバンヤンのこの著を評して何といったかというところ「たぶん純粹という点から英語を論じたときにはジョン・バンヤンの"Pilgrim's Progress"に及ぶ文章はあるまい。これはまったく外からの雑りのない、もつとも純粹なる英語であるだろう」と申しました。そうしてかくも有名なる本は何であるかというところ無学者の書いた本であります。それでもしわれわれにジョン・バンヤンの精神がありますならば、すなわちわれわれが他人から聞いたつまらない説を伝えるのでなく、自分の持った神学説を伝えるで

なくして、私はこう感じた、私はこう苦しんだ、私はこう喜んだ、ということを書くならば、世間の人はドレだけ喜んでこれを読むか知れませぬ。今の人が読むのみならず後世の人も実に喜んで読みます。バンヤンは実に「真面目なる宗教家」であります。心の実験を真面目に表わしたものが英国第一等の文学であります。それだによつてわれわれのなかに文学者になりたいと思う観念を持つ人がありまするならば、バンヤンのような心を持たなくてはなりません。彼のような心を持ったならば実に文学者になれぬ人はいないと思います。

今ここに丹羽さんがいませぬから少し丹羽さんの悪口をいませう（笑声起る）……後でいいつけてはイケマセンよ（大笑）。

丹羽さんが青年会において『基督教青年』という雑誌を出した。それで私のところへもだいぶ送ってきた。そこで私が先日東京へ出ましたときに、先生が「ドウです内村君、あなたは『基督教青年』をドウお考えなさいますか」と問われたから、私は真面目にまた明白に答えた。「失礼ながら『基督教青年』は私のところへきますと私はすぐそれを厠へ持つていつて置いてきます。」ところが先生たいへん怒った。それから私はそのわけをいいました。アノ『基督教青年』を私が汚穢い用に用いるのは何であるかというに、実につまらぬ雑誌であるからです。なにゆえにつまらないかというに、アノ雑誌のなかに名論卓説がないからつまらないというのではありません。アノ雑誌のつまらないわけは、青年が青

年らしくないことを書くからです。青年が学者の真似をして、つまらない議論をアツチからも引き抜き、コツチからも引き抜いて、それを鋏刀と糊とでくつつけたような論文を出すから読まないのです。もし青年が青年の心のままを書いてくれたならば、私はこれを大切にして年の終りになったら立派に表装して、私の Librar
y (書函) のなかのもつとも価値あるものとして遺しておきましょうと申しました。それからその雑誌はだいぶ改良されたようでもあります。それです、私は名論卓説を聴きたいのではない。私の欲するところと社会の欲するところは、女よりは女のいうようなことを聴きたい、男よりは男のいうようなことを聴きたい、青年よりは青年の思っているとおりのことを聴きたい、老人よりは老

人の思っているとおりのことを聴きたい。それが文学です。それゆえにただわれわれの心のままを表白してごらんなさい。ソウしてゆけばいくら文法は間違っておつても、世の中の人が読んでくれる。それがわれわれの遺物です。もし何もすることができなければ、われわれの思うままを書けばよろしいのです。私は高知から来た一人の下女を持っています。非常に面白い下女で、私のところに参加してから、いろいろの世話をいたします。ある時はほとんど私の母のように私の世話をしてくれます。その女が手紙を書くのを側で見えていますと、非常な手紙です。筆を横に取つて、仮名で、土佐言葉で書く。今あとで坂本さんが出て土佐言葉の標本を諸君に示すかも知れませぬ（大笑拍手）。ずいぶん面白い言

葉であります。仮名で書くのですから、土佐言葉がソツクリそのまま出てくる。それで彼女は長い手紙を書きます。実に読むのに骨が折れる。しかしながら私はいつでもそれを見て喜びます。その女は信者でも何でもありません。毎月三日月様になりますと私のところへ参つて「ドウゾ旦那さまお錢を六厘」という。「何に使うか」というと、黙っている。「何でもよいから」という。やると豆腐を買つてきまして、三日月様に豆腐を供える。後で聞いてみると「旦那さまのために三日月様に祈っておかぬと運が悪い」と申します。私は感謝していつでも六厘差し出します（大笑）。それから七夕様がきますといつでも私のために七夕様に団子だの梨だの柿などを供えます。私はいつもそれを喜んで供えさせます。

その女が書いてくれる手紙を私は実に多くの立派な学者先生の文学を『六合雑誌』などに拝見するよりも喜んで見ます。それが本当の文学で、それが私の心情に訴える文学。……文学とは何でもない、われわれの心情に訴えるものであります。文学というものはソウいうものであるならば……ソウいうものでなくてはならぬ……それならばわれわれはなろうと思えば文学者になることができます。われわれの文学者になれないのは筆が執れないからなれないのではない、われわれに漢文が書けないから文学者になれないのではない。われわれの心に鬱勃たる思想が籠もっておつて、われわれが心のままをジョン・バンヤンがやったように綴ることができるならば、それが第一等の立派な文学であります。カーラ

イルのいったとおり「何でもよいから深いところへ入れ、深いところにはことごとく音楽がある」。実にあなたがたの心情をありのままに書いてごらんさい、それが流暢なる立派な文学であります。私自身の経験によっても私は文天祥がドウ書いたか、白樂天がドウ書いたかと思つていろいろ調べてしかる後に書いた文よりも、自分が心のありのままに、仮名の間違ひがあろうが、文法に合うまいが、かまわないで書いた文の方が私が見ても一番良い文章であつて、外の人の評してもまた一番良い文章であるといひます。文学者の秘訣はそこにあります。こういう文学ならばわれわれ誰でも遺すことができる。それゆゑに有難いことでございます。もしわれわれが事業を遺すことができなければ、われわれに

神様が言葉というものを下さいましたからして、われわれ人間に文学というものを下さいましたから、われわれは文学をもつてわれわれの考えを後世に遺して逝くことができます。

ソウ申しますとまたこういう問題が出てきます。われわれは金を溜めることができず、また事業をなすことができない。それからまたそれならばといって、あなたがたがみな文学者になったら、たぶん活版屋では喜ぶかもしれないけれども、社会では喜ばない。文学者の世の中にふえるということは、ただ活版屋と紙製造所を喜ばすだけで、あまり社会に益をなさないかも知れない。ゆえにもしわれわれが文学者となることができず、またなる考えもなし、バンヤンのような思想を持つておつても、バンヤンのよ

うに綴ることができないときには、別に後世への遺物はないかという問題が起る。それは私にもたびたび起つた問題であります。なるほど文学者になることは私が前に述べましたとおりヤサシイこととは思いますが、しかし誰でも文学者になるということとは実は望むべからざることでもあります。たとえば、学校の先生……ある人がいうように何でも大学に入って学士の称号を取り、あるいはその上にアメリカへでも往つて学校を卒業さえしてくれば、それで先生になれると思うのと同じことでもあります。私はたびたび聞いて感じまして、今でも心に留めておりますが、私がいへん世話になりましたアーマスト大学の教頭シーリー先生がいった言葉に「この学校で払うだけの給金を払えば学者を得ること

はいくらでも得られる。地質学を研究する人、動物学を研究する人はいくらもある。地質学者、動物学者はたくさんいる。しかしながら地質学、動物学を教えることのできる人は実に少い。文学者はたくさんいる、文学を教えることのできる人は少い。それゆえにこの学校に三、四十人の教授がいるけれども、その三、四十人の教師は非常に貴い、なぜなればこれらの人は学問を自分で知っているばかりでなく、それを教えることのできる人であります」と。これはわれわれが深く考うべきことで、われわれが学校さえ卒業すればかならず先生になれるという考えを持つてはならぬ。学校の先生になるということは一種特別の天職だと私は思っております。よい先生というものはかならずしも大学者ではない。大

島君もご承知でございますが、私どもが札幌におりましたときに、クラーク先生という人が教師であつて、植物学を受け持つておりました。その時分にはほかに植物学者がおりませぬから、クラーク先生を第一等の植物学者だと思つておりました。この先生のいつたことは植物学上誤りのないことだと思つておりました。しかしながら彼の本国に行つて聞いたたら、先生だいぶ化の皮が現われた。かの国のある学者が、クラークが植物学について口を利くなどとは不思議だ、といつて笑つておりました。しかしながら、とにかく先生は非常な力を持つておつた人でした。どういふ力であつたかというに、すなわち植物学を青年の頭のなかへ注ぎ込んで、植物学という学問の *Interest* を起す力を持つた人でありました。

それゆえに植物学の先生としては非常に価値のあつた人でありました。ゆえに学問さえすれば、われわれが先生になれるという考えをわれわれは持つべきでない。われわれに思想さえあれば、われわれがことごとく先生になれるという考えを抛却してしまわねばならぬ。先生になる人は学問ができるよりも——学問もなくしてはなりませんけれども——学問ができるよりも学問を青年に伝えることのできる人でなければならぬ。これを伝えることは一つの技術であります。短い言葉でありますけれども、このなかに非常の意味が含まっております。たといわれわれが文学者になりたい、学校の先生になりたいという望みがあつても、これかならずしも誰にもできるものではないと思ひます。

それで金も遺すことができず、事業も遺すことができない人は、かならずや文学者または学校の先生となつて思想を遺して逝くことが出来るかというに、それはそうはいかぬ。しかしながら文学と教育とは、工業をなすということ、金を溜めるということよりも、よほどやさしいことだと思ひます。なぜなれば独立でできることであるからです。ことに文学は独立的の事業である。今日のような学校にてはこの学校にても、Mission Schoolを始めとしてどこの官立学校にても、われわれの思想を伝えるといつても實際伝えることはできない。それゆえ学校事業は独立事業としてはずいぶん難い事業であります。しかしながら文学事業にいたつては社会はほとんどわれわれの自由に任せる。それゆえに多くの独

立を望む人が政治界を去つて宗教界に入り、宗教界を去つて教育界に入り、また教育界を去つてついに文学界に入ったことは明かな事実であります。多くのエライ人は文学に逃げ込みました。文学は独立の思想を維持する人のために、もつとも便益なる隠れ場所であろうと思います。しかしながらただ今も申し上げましたとおり、かならずしも誰にでも入ることのできる道ではない。

ここにいたつてこういう問題が出てくる。文学者にもなれず学校の先生にもなれなかつたならば、それならば私は後世に何をも遺すことはできないかという問題が出てくる。何かほかに事業はないか、私もたびたびそれがために失望に陥ることがある。しかしらば私には何も遺すものはない。事業家にもなれず、金を溜める

こともできず、本を書くこともできず、ものを教えることもできない。ソウすれば私は無用の人間として、平凡の人間として消えてしまわなければならぬか。陸放翁のいったごとく「我死骨即朽、青史亦無名」と嘆じ、この悲嘆の声を発してわれわれが生涯を終るのではないかと思うて失望の極に陥ることがある。しかれども私はそれよりモット大きい、今度は前の三つと違いました。誰にも遺すことのできる最大遺物があると思う。それは実に最大遺物であります。金も実に一つの遺物でありますけれども、私はこれを最大遺物と名づけることはできない。事業も実に大遺物たるには相違ない、ほとんど最大遺物というてもようございますけれども、いまだこれを本当の最大遺物ということとはできない。文学も先刻

お話ししたとおり実に貴いものであつて、わが思想を書いたものは実に後世への価値ある遺物と思ひますけれども、私がこれをもつて最大遺物ということはできない。最大遺物ということのできないわけは、一つは誰にも遺すことのできる遺物でないから最大遺物ということはできないのではないかと思う。そればかりでなくその結果はかならずしも害のないものではない。昨日もお話ししたとおり金は用い方によつてたいへん利益がありますけれども、用い方が悪いとまたたいへん害を来すものである。事業におけるも同じことであります。クロムウエルの事業とか、リビングストンの事業はたいへん利益がありますかわりに、またこれには害が一緒に伴うております。また本を書くことも同じようにそのなか

に善いこともありまた悪いこともたくさんあります。われわれはそれを完全なる遺物または最大遺物と名づけることはできないと思います。

それならば最大遺物とはなんであるか。私が考えてみますに人間が後世に遺すことのできる、ソウしてこれは誰にも遺すことのできるところの遺物で、利益ばかりあつて害のない遺物がある。それは何であるかならば勇ま。し。い。高。尚。な。る。生。涯。で。あ。る。と。思。い。ま。す。これが本当の遺物ではないかと思う。他の遺物は誰にも遺すことのできる遺物ではないと思います。しかして高尚なる勇ましい生涯とは何であるかという、私がここで申すまでもなく、諸君もわれわれも前から承知している生涯であります。すなわちこの世

の中はこれはけっして悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であるということに信ずることである。失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中でなくして、歡喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈物としてこの世を去るということにあります。その遺物は誰にも遺すことのできる遺物ではないかと思う。もし今までのエライ人の事業をわれわれが考えてみますときに、あるいはエライ文学者の事業を考えてみますときに、その人の書いた本、その人の遺した事業はエライものでございますが、しかしその人の生涯に較べたときには実に小さい遺物だろうと思ひます。パウロの書翰は実に

有益な書翰でありますけれども、しかしこれをパウロの生涯に較べたときには価値のはなはだ少いものではないかと思う。パウロ彼自身はこのパウロの書いたロマ書や、ガラテヤ人に贈った書翰よりもエライ者であると思います。クロムウエルがアングロサクソン民族の王国を造ったことは大事業でありますけれども、クロムウエルがあゝの時代に立つて自分の独立思想を實行し、神によつてあの勇壮なる生涯を送つたという、あのクロムウエル彼自身の生涯というものは、これはクロムウエルの事業に十倍も百倍もする社会にとつての遺物ではないかと考えます。私は元来トーマス・カーライルの本を非常に敬読する者であります。それである人にはそれがために嫌われますけれども、私はカーライルという人

については全体非常に尊敬を表しております。たびたびあの人の本を読んで利益を得、またそれによつて刺激をも受けたこととございます。けれども、私はトーマス・カーライルの書いた四十冊ばかりの本をみな寄せてみてカーライル彼自身の生涯に較べたときには、カーライルの書いたものは実に価値の少いものであると思ひます。先日カーライルの伝を読んで感じました。ご承知の通りカーライルが書いたもののなかで一番有名なものはフランス革命の歴史でございます。それである歴史家がいうたに「イギリス人の書いたもので歴史的の叙事、ものを説き明した文体からいえば、カーライルの『フランス革命史』がたぶん一番といつてもよいであろう、もし一番でなければ一番のなかに入るべきものであ

る」ということであります。それでこの本を読む人はことごとく同じ感覚を持つだろうと思います。実に今より百年ばかり前のことをわれわれの目の前に活きている画のように、ソウして立派な画人が書いてもアノようには書けぬというように、フランス革命のパノラマ（活画）を示してくれたものはこの本であります。それでわれわれはその本に非常の価値を置きます。カーライルがわれわれに遺してくれたこの本は実にわれわれの貴ぶところでございます。しかしながらフランスの革命を書いたカーライルの生涯の実験を見ますと、この本よりかまだ立派なものがあります。その話は長いけれどもここにあなたがたに話すことを許していただきたい。カーライルがこの書を著わすのは彼にとってほとんど

一生涯の仕事であった。チヨット『革命史』を見まするならば、このくらいの本は誰にでも書けるだろうと思うほどの本であります。けれども歴史的の研究を凝らし、広く材料を集めて成った本でありまして、実にカーライルが生涯の血を絞って書いた本であります。それで何十年ですか忘れましたが、何十年かかかってようやく自分の望みのとおりの本が書けた。それからしてその本が原稿になってこれを罫紙に書いてしまった。それからしてこれはモウじきに出版するときがくるだろうと思つて待つておつた。そのときに友人が来ましてカーライルに遇つたところが、カーライルがその話をしたら「実に結構な書物だ、今晚一読を許してもらいたい」といった。そのときにカーライルは自分の書いたものは

つまらないものだと思つて人の批評を仰ぎたいと思つたから、貸してやった。貸してやるとその友人はこれを家へ持つていった。そうすると友人の友人がやつてきて、これを手に取つて読んでみて、「これは面白い本だ、一つドウゾ今晚私に読ましてくれ」といった。ソコで友人がいうには「明日の朝早く持つてこい、そうすれば貸してやる」といつて貸してやつたら、その人はまたこれをその家へ持つていつて一所懸命に読んで、暁方まで読んだところが、あしたの事業に妨げがあるといふので、その本をば机の上に抛り放しにして床について自分は寝入つてしまった。そうすると翌朝彼の起きない前に下女がやつてきて、家の主人が起きる前にストーブに火をたきつけようと思つて、ご承知のとおり西洋で

は紙をコツパの代りに用いてクベますから、何か好い反古はないかと思つて調べたところが机の前に書いたものがだいぶひろがつていたから、これは好いものと思つて、それをみな丸めてストーブのなかへ入れて火をつけて焼いてしまった。カーライルの何十年ほどかかった『革命史』を焼いてしまった。時計の三分か四分の間に煙となつてしまった。それで友人がこのことを聞いて非常に驚いた。何ともいうことができない。ほかのものであるならば、紙幣を焼いたならば紙幣を償うことができる、家を焼いたならば家を建ててやることもできる、しかしながら思想の凝つて成つたもの、熱血を注いで何十年かかつて書いたものを焼いてしまったのは償いようがない。死んだものはモウ活き歸らない。それがた

めに腹を切ったところが、それまでであります。それで友人に話したところが、友人も実にドウすることもできないで一週間黙っておった。何と行ってよいかわからぬ。ドウモ仕方がないから、そのことをカーライルにいった。そのときにカーライルは十日ばかりぼんやりとして何もしなかつたということであります。さすがのカーライルもそうであつたらうと思ひます。それで腹が立つた。ずいぶん短気の人でありましたから、非常に腹を立てた。彼はそのときは歴史などは抛りぽかして何にもならないつまらない小説を読んだそうです。しかしながらその間に己で己に帰つていうに「トーマス・カーライルよ、汝は愚人である、汝の書いた『革命史』はソナナに貴いものではない、第一に貴いのは汝がこ

の艱難に忍んでそうしてふたたび筆を執つてそれを書き直すことである、それが汝の本当にエライところである、実にそのことについて失望するような人間が書いた『革命史』を社会に出しても役に立たぬ、それゆえにモウ一度書き直せ」といつて自分で自分を鼓舞して、ふたたび筆を執つて書いた。その話はそれだけの話です。しかしわれわれはそのときのカーライルの心中にはいつたときには実に推察の情溢るるばかりであります。カーライルのエライことは『革命史』という本のためにではなくして、火にて焼かれたものをふたたび書き直したということである。もしあるいはその本が遺つておらずとも、彼は実に後世への非常の遺物を遺したのであります。たとわれわれがイクラやりそこなつてもイ

クラ不運にあつても、そのときに力を回復して、われわれの事業を捨ててはならぬ、勇気を起してふたたびそれに取りかからなければならぬ、という心を起してくれたことについて、カーライルは非常な遺物を遺してくれた人ではないか。

今時の弊害は何であるかといひますれば、なるほど金がない、われわれの国に事業が少い、良い本がない、それは確かです。しかしながら日本人お互いに今要するものは何であるか。本が足りないのでしょうか、金がないのでしょうか、あるいは事業が不足なのであるでしょうか。それらのことの不足はもとよりないことはない。けれども、私が考えてみると、今日第一の欠乏は Life 生命の欠乏であります。それで近ごろはしきりに学問ということ、

教育ということ、すなわち Culture（修養）ということが大へんにわれわれを動かします。われわれはドウしても学問をしなければならぬ、ドウしてもわれわれは青年に学問をつぎ込まねばならぬ、教育をのこして後世の人を誠しめ、後世の人を教えねばならぬというてわれわれは心配いたします。もちろんこのことはたいへんよいことであります。それでもしわれわれが今より百年後にこの世に生まれてきたと仮定して、明治二十七年の人の歴史を読むとすれば、ドウでしょう、これを読んできてわれわれにどういう感じが起りましたでしょうか。なるほどここにも学校が建った、ここにも教会が建った、ここにも青年会館が建った、ドウして建ったろうと行ってだんだん読んでみますと、この人はアメリカへ行っ

て金をもらってきて建てた、あるいはこの人はこういう運動をして建てたということがある。そこでわれわれがこれを読みますとき、「アア、とても私にはそんなことはできない、今ではアメリカへ行っても金はもらえまい、また私にはそのように人と共同する力はない。私にはそういう真似はできない、私はとてもそういう事業はできない」というて失望しましょう。すなわち私が今から五十年も百年も後の人間であつたならば、今日の時代から学校を受け継いだかも知れない。教会を受け継いだかも知れませぬ。けれども私自身を働かせる原動力をばもらわない。大切なるものをばもらわないに相違ない。しかしもしここにつまらない教会が一つあるとすれば、そのつまらない教会の建物を売つてみたところ

ろがほとんどわずかの金の価値しかないかも知れませぬ。しかしながらその教会の建った歴史を聞いたときに、その歴史がこういう歴史であつたと仮定めてごらんさい……この教会を建てた人はまことに貧乏人であつた、この教会を建てた人は学問も別にない人であつた、それだけでもこの人は己のすべての浪費を節して、すべての欲情を去つて、まるで己の力だけにたよつて、この教会を造つたものである。……こういう歴史を読むと私にも勇気が起つてくる。かの人にできたならば己にもできないことはない、われも一つやってみようというようになる。

私は近世の日本の英傑、あるいは世界の英傑といつてもよろしい人のお話をいたしましょう。この世界の英傑のなかに、ちよう

どわれわれの留まっているこの箱根山の近所に生まれた人で二宮金次郎という人がありました。この人の伝を読みましたときに私は非常な感覚をもらった。それでドウも二宮金次郎先生には私は現に負うところが実に多い。二宮金次郎氏の事業はあまり日本にひろまってはおらぬ。それで彼のなした事業はことごとくこれを纏めてみましたならば、二十カ村か三十カ村の人民を救っただけに止まっていると考えます。しかしながらこの人の生涯が私を益し、それから今日日本の多くの人を益するわけは何であるかという、何でもない、この人は事業の贈物にあらずして生涯の贈物を遺した。この人の生涯はすでにご承知の方もありましようが、チヨット申してみましよう。二宮金次郎氏は十四のときに父を失

い、十六のときに母を失い、家が貧乏にして何物もなく、ためにごく残酷な伯父に預けられた人であります。それで一文の銭もなし家産はことごとく傾き、弟一人、妹一人持っていた。身に一文もなくして孤児です。その人がドウして生涯を立てたか。伯父さんの家にあつてその手伝いをしている間に本が読みたくなつた。そうしたときに本を読んでおつたら、伯父さんに叱られた。この高い油を使って本を読むなどということはまことに馬鹿馬鹿しいことだといつて読ませぬ。そうすると、黙つていて伯父さんの油を使つては悪いということを知りましたから、「それでは私は私の油のできるまでは本を読まぬ」という決心をした。それでどうしたかといふと、川辺の誰も知らないところへ行きまして、菜種

を蒔いた。一カ年かかって菜種を五、六升も取った。それからその菜種を持って行って、油屋へ行つて油と取換えてきまして、それからその油で本を見た。そうしたところがまた叱られた。「油ばかりお前のものであれば本を読んでもよいと思つては違ふ、お前の時間も私のものだ。本を読むなどという馬鹿なことをするならよいからその時間に縄を縋れ」といわれた。それからまた仕方がない、伯父さんのいうことであるから終日働いてあとで本を読んだ、……そういう苦学をした人であります。どうして自分の生涯を立てたかというに、村の人の遊ぶとき、ことにお祭り日などには、近所の畑のなかに洪水で沼になったところがあつた、その沼地を伯父さんの時間でない、自分の時間に、その沼地よりこと

ごとく水を引いてそこでもって小さい鍬で田地を拵えて、そこへ持つていつて稲を植えた。こうして初めて一俵の米を取った。その人の自伝によりますれば、「米を一俵取ったときの私の喜びは何ともいえなかつた。これ天が初めて私に直接に授けたものにしてその一俵は私にとっては百万の価値があつた」というてある。それからその方法をだんだん続けまして二十歳のときに伯父さんの家を辞した。そのときには三、四俵の米を持つておつた。それから仕上げた人であります。それでこの人の生涯を初めから終りまで見ますと、「この宇宙というものは実に神様……神様とはいませぬ……天の造つてくださったもので、天というものは実に恩恵の深いもので、人間を助けよう助けようとはばかり思っている。

それだからもしわれわれがこの身を天と地とに委ねて天の法則に従つていったならば、われわれは欲せずといえども天がわれわれを助けてくれる」というこういう考えであります。その考えを持つたばかりでなく、その考えを実行した。その話は長うございませけれども、ついには何万石という村々を改良して自分の身をこごとく人のために使つた。旧幕の末路にあたつて経済上、農業改良上について非常の功勞のあつた人であります。それでわれわれもそういう人の生涯、二宮金次郎先生のような人の生涯を見ますときに、「もしあの人にもアアいうことができたならば私にもできないことはない」という考えを起します。普通の考えではありませんけれども非常に価値のある考えであります。それで人に頼

らずともわれわれが神にたより己にたよつて宇宙の法則に従えば、この世界はわれわれの望むとおりになり、この世界にわが考えを行ふことができるという感覚が起つてくる。二宮金次郎先生の事業は大きくなかつたけれども、彼の生涯はドレほどの生涯であつたか知れませぬ。私ばかりでなく日本中幾万の人はこの人から「インスピレーション」を得たであります。あなたもこの人の伝を読んでごらん下さい。『少年文学』の中に『二宮尊徳翁』というのが出ておりますが、アレはつまらない本です。私のよく読みましたのは、農商務省で出版になりました、五百ページばかりの『報徳記』という本です。この本を諸君が読まれんことを切に希望します。この本はわれわれに新理想を与え、

新希望を与えてくれる本であります。実にキリスト教の『バイブル』を読むような考えがいたします。ゆえにわれわれがもし事業を遺すことができずとも、二宮金次郎的の、すなわち独立生涯を躬行していったならば、われわれは実に大事業を遺す人ではないかと思えます。

私は時が長くなりましたからもうしまいにいたしますが、常に私の生涯に深い感覚を与える一つの言葉を皆様の前に繰り返した。ことにわれわれのなかに一人アメリカのマサチューセツ州マウント・ホリヨーク・セミナリーという学校へ行って卒業してきた方がおりますが、この女学校は古い女学校であります。たいへんよい女学校であります。しかしながらも私をしてその女学

校を評せしむれば、今の教育上ことに知育上においては私はけつしてアメリカ第一等の女学校とは思わない。米国にはたくさんよい女学校がございます。スミス女学校というような大きな学校もあります。またボストンのウエレスレー学校、フィラデルフィアのプリンモアー学校というようなものがございます。けれどもマウント・ホリヨーク・セミナリーという女学校は非常な勢力をもつて非常な事業を世界になした女学校であります。何故だといいますと（その女学校はこの節はだいぶよく揃ったそうであります）が、このあいだまでは不整頓の女学校でありました）、それが世界を感化するの勢力を持つにいたった原因は、その学校にはエライ非常な女がおった。その人は立派な物理学の機械に優つて、立

派な天文台に優つて、あるいは立派な学者に優つて、価値のある魂を持つておつたメリー・ライオンという女でありました。その生涯をことごとく述べることは今ここではできませんが、この女史が自分の女生徒に遺言した言葉はわれわれのなかの婦女を励まさねばならぬ、また男子をも励まさねばならぬものである。すなわち私はその女の生涯をたびたび考えてみますに、実に日本の武士のような生涯であります。彼女は実に義侠心に充ち満ちておつた女であります。彼女は何というたかというに、彼女の女生徒にこういうた。

他の人の行くことを嫌うところへ行け。

他の人の嫌がることをなせ

これがマウント・ホリヨーク・セミナーの立つた土台石であります。これが世界を感化した力ではないかと思えます。他の人の嫌がることをなし、他の人の嫌がるどころへ行くという精神であります。それでわれわれの生涯はその方に向って行きつつあるか。われわれの多くはそうでなくして、他の人もなすから己もなそうというのではないか。他の人もアアいうことをするから私もソウしようというふうではないか。ほかの人もアメリカへ金もらいに行くから私も行こう、他の人も壮士になるから私も壮士になろう、はなはだしきはだいぶこのごろは耶蘇教が世間の評判がよくなつたから私も耶蘇教になろう、というようなものがございませぬ。関東に往きますと関西にあまり多くないものがある。関東に

は良いものがだいぶたくさんあります。関西よりも良いものがあると思います。関東人は意地ということをしきりに申します。意地の悪い奴はつむじが曲っていると申しますが毬栗頭にてはすぐわかる。頭のつむじがここに（手真似にて）こう曲がっている奴はかならず意地が悪い。人が右へ行こうと左といい、アしようといえバコウしようというふうで、ことに上州人にそれが多いといえます（私は上州の人間ではありませんぬけれども）。それでかならずしもこれは誉むべき精神ではないと思うが、しかしながら武士の意地というものです。その意地をわれわれから取り除けてしまったならば、われわれは腰抜け武士になつてしまふ。徳川家康のエライところはたくさんありますけれども、諸

君のご承知のとおり彼が子供のとくに川原へ行つてみたところが、子供の二群が戦をしておつた、石撃をしておつた。家康はこれを見て彼の家来に命じて人数の少い方を手伝つてやれといった。多い方はよろしいから少い方へ行つて助けてやれといった。これが徳川家康のエライところであります。それでいつでも正義のために立つ者は少数である。それでわれわれのなすべきことはいつでも少数の正義の方に立つて、そうしてその正義のために多勢の不義の徒に向つて石撃をやらなければなりません。もちろんかならずしも負ける方を助けるといふのではない。私の望むのは少数とともに戦うの意地です。その精神です。それはわれわれのなかにみな欲しい。今日われわれが正義の味方に立つときに、われわれ

少数の人が正義のために立つときに、少くともこの夏期学校に來ている者くらいはともにその方に起つてもらいたい。それでドウゾ後世の人がわれわれについてこの人らは力もなかつた、富もなかつた、学問もなかつた人であつたけれども、己の一生涯をめぐめい持つておつた主義のために送つてくれたといわれたいではありませんか。これは誰にも遺すことのできる生涯ではないかと思ひます。それでその遺物を遺すことができたと思ふと実にわれわれは嬉しい、たといわれわれの生涯はドンナ生涯であつても。

たびたびこういうような考えは起りませぬか。もし私に家族の關係がなかつたならば私にも大事業ができたであろう、あるいはもし私に金があつて大学を卒業し欧米へ行つて知識を磨いてきた

ならば私にも大事業ができたであろう、もし私に良い友人があつたならば大事業ができたであろう、こういう考えは人々に實際起る考えであります。しかれども種々の不幸に打ち勝つことによつて大事業というものができ、それが大事業であります。それゆえにわれわれがこの考えをもつてみますと、われわれに邪魔のあるのはもつとも愉快なことであります。邪魔があればあるほどわれわれの事業ができる。勇ましい生涯と事業を後世に遺すことができる。とにかく反対があればあるほど面白い。われわれに友達がいない、われわれに金がない、われわれに学問がないというのが面白い。われわれが神の恩恵を享け、われわれの信仰によつてこれらの不足に打ち勝つことができれば、われわれは非常な事業を

遺すものである。われわれが熱心をもつてこれに勝てば勝つほど、後世への遺物が大きくなる。もし私に金がたくさんあつて、地位があつて、責任が少くして、それで大事業ができたところが何でもない。たとい事業は小さくても、これらのすべての反対に打ち勝つことによつて、それで後世の人が私によつて大いに利益を得るにいたるのである。種々の不都合、種々の反対に打ち勝つことが、われわれの大事業ではないかと思う。それゆえにヤコブのように、われわれの出遭う艱難についてわれわれは感謝すべきではないかと思ひます。

まことに私の言葉が錯雑しておつて、かつ時間も少くございませうから、私の考えをことごとく述べることはできない。しかしな

がら私は今日これで御免をこうむって山を降ろうと思います。それで来年またふたたびどこかでお目にかかるときまでには少くとも幾何の遺物を貯えておきたい。この一年の後にわれわれがふたび会しますときには、われわれが何か遺しておつて、今年の後世のためにこれだけの金を溜めたというのも結構、今年は後世のためにこれだけの事業をなしたというのも結構、また私の思想を雑誌の一論文に書いて遺したというのも結構、しかしそれよりもいつそう良いのは後世のために私は弱いものを助けてやった、後世のために私はこれだけの艱難に打ち勝つてみた、後世のために私はこれだけの品性を修練してみた、後世のために私はこれだけの情実に勝

つてみた、という話を持ってふたたびここに集まりたいと考えます。この心掛けをもってわれわれが毎年毎日進みましたならば、われわれの生涯は決して五十年や六十年の生涯にはあらずして、実に水の辺りに植えたる樹のようなもので、だんだんと芽を萌き枝を生じてゆくものであると思います。けっして竹に木を接ぎ、木に竹を接ぐような少しも成長しない価値のない生涯ではないと思います。こういう生涯を送らんことは実に私の最大希望でございまして、私の心を毎日慰め、かついろいろのことをなすに当って私を励ますことであります。それで私のなお一つの題の「真面目ならざる宗教家」というのは時間がありませぬからここに述べませぬ。述べませぬけれども、しかしながら私の精神のあるところ

ろは皆様にも十分お話しいたしたと思います。己の信ずることを実行するものが真面目なる信者です。ただただ壮言大語することは誰にもできません。いくら神学を研究しても、いくら哲学書を読みても、われわれの信じた主義を真面目に実行するところの精神がありません。神はわれわれにとって異邦人であります。それゆえにわれわれは神がわれわれに知らしたことをそのまま実行いたさなければなりません。こういたさねばならぬと思うたことはわれわれはことごとく実行しなければならぬ。もしわれわれが正義はついに勝つものにして不義はついに負けるものであるということを経世間に発表するものであるならば、そのとおりにわれわれは実行しなければならぬ。これを称して真面目なる信徒

と申すのです。われわれに後世に遺すものは何もなくとも、われわれに後世の人にこれぞというて覚えられるべきものはなにもなくとも、アノ人はこの世の中に生きているあいだは真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを後世の人に遺したいと思えます。（拍手喝采）

青空文庫情報

底本：「後世への最大遺物 デンマルク国の話」岩波文庫、岩波書店

1946（昭和21）年10月10日第1刷発行

1976（昭和51）年3月16日第30刷改版発行

1994（平成6）年8月6日第64刷発行

入力：ゆうき

校正：吉田亜津美

1999年12月31日公開

2003年6月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

後世への最大遺物

内村鑑三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>